
仮面ライダーディケイド-ドラえもんの世界-

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド ドラえもんの世界一

【Nコード】

N8725M

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

嵐を呼ぶ五歳児がいた『しんのすけの世界』での出会いと救済を経て、その後『シンケンジャーの世界』を救うことに成功した門矢士達一行が次にたどり着いた世界で出会ったのは謎の青いタヌキではなく、猫型ロボット（自称）だった??? 『世界の破壊者』仮面ライダーディケイド、未来の技術で生まれた夢のロボット・ドラえもん：二人の『D』の名を冠する者同士が出会った時、二つの瞳は何を見る…？

第一話―THE DORAYAKI―（前書き）

御存じの方はお久しぶりです、初めての方ははじめまして、作者の柳雨と申します

本作は前作『仮面ライダーディケイドークレヨンしんちゃんの世界―』の続編（極力未見の方でも楽しめる内容にしていきたいと思えます）で、時期は『シンケンジャーの世界』終了後：注意点は途中で小説タイトルを変える可能性があります

仮面ライダーディケイドの新たな旅、いよいよ本格スタート！

第一話―THE DORAYAKI―

―光写真館。

「ここが次の世界か…。」

―館内の壁に掛けられたタペストリーには、光が溢れ出す開かれた机の引き出しと皿に盛られた美味しそうなドラ焼きの絵が描かれていた。

「しかし、毎回思うが一体何の世界かサッパリ解らないな…。」

「士君は何か心当たりはありませんか？」

「知らん、こんな妙ちくりんな世界は見たこと無いな。」

―小野寺ユウスケと光夏海が門矢士に尋ねた、あらゆる『ライダーの世界』の知識を知る彼でも知らない未知の世界とは珍しい…。

―門矢士、またの名を仮面ライダーディケイド一行はこれまで様々な『ライダーの世界』を巡って旅してきた。

―クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバなどの九つのライダーの世界。

―闇の支配者・ダークライダーが管理する『ネガの世界』。

―世界を巡る怪盗・海東大樹こと仮面ライダーディエンドの出身世

界『ディエンドの世界』

ーライダーはいないが嵐を呼ぶ五歳児がいた『しんのすけの世界』。

ーライダーの代わりに世界を守る五色の侍達がいた『シンケンジャ
ーの世界』。

ーそして今度の世界とは…？

ー世界の破壊者・ディケイド、その瞳は何を見る…？

ー士達はとりあえず外に出た。

「なんだこりゃ？」

「『ブレイドの世界』での格好に似てますね。」

ー士は自分の格好が変わったことに気づき、夏海が指摘する。

ー士は異世界に行く度に色々な服装になる…そして今回の士は『ブ
レイドの世界』での料理長姿によく似た白い服装になっている。

「あゝすみません。」

「んん…？」

「ふと士は誰かに声をかけられた…思わず振り返るとそこにいた『者』を見て絶句した。」

（な、なんだ…こいつはッ!?!）

「士が警戒するのは無理も無い…何故なら『ソイツ』は人間ではなかった…。」

「全体的に丸く、ずんぐりしたフォルムをした青いボディ、首には鈴、短い手足で手は白玉の様に丸っこい、そして顔は赤く丸い鼻にネコみたいなヒゲ、尻にはピコピコ揺れる赤い玉が先っちょについた尻尾（?）が生えていた。」

「そしてどういうわけか、腹にはポケットの様なものが付いている。」

「これらの特徴を一言で言えば…。」

「…タヌキか?」

「タヌキじゃないッ!! ネコ型ロボットだ!!」

「自称・ネコ型ロボットを名乗る謎の人（?）はよほど『タヌキ』呼ばわりが嫌なのか? 士に対してプリプリ怒る。」

「え? ネコなのか? オレはてっきりダルマかと…。」

「私はマトリョーシカ人形かと…。」

「前者はまだ解るけど後者は何!?! だからネコ型ロボットだってば!!」

—ユウスケと夏海までもが彼をネコ型ロボットとは認識出来なかったように怒られた…。

—ちなみにマトリョーシカ人形とはロシアの木製の人形で、この人形を開けると中に小さな人形が入っており、その人形をさらに開けるとまた小さな人形が入っており、そしてさらに開けるとまたまた小さな人形が…という不思議なエンドレスが繰り返される玩具である。

「何を言う？ コイツがタヌキ以外だったらなんだ？ フグか？ ナマズか？」

「丸やヒゲ繋がりがよ…いやいや、海坊主だろ？」

「こけしじゃないですか？」

「いい加減にしろオオオオッ！！」

—士達からふざけた侮辱を受けてついに自称・ネコ型ロボットはマジギレした。

「ど、どうしたのドラえもん！？」

—その時、通りすがりにネコ型ロボット…彼を『ドラえもん』と、名前で呼ぶ黄色い長袖に黒い短パンの丸い眼鏡の少年が現われる。

「あ！聞いてよ、のび太君！この和菓子屋さん、いきなり僕を見てタヌキだって…！！」

「いや…事実じゃん？君を初見でネコだなんて、説明しない限り解るわけではないって。」

「な、何をう！？」

—どうやらよく間違われるらしいのか、慣れた様子でドラえもんをあしらうのび太という名の少年…。

「は？『和菓子屋』…？…って、ああ、なるほど…。」

「士君のこの世界では和菓子屋さんなんですネ。」

「へえ…随分変わった職業だな。」

—士はドラえもんに言われてようやく『この世界』での自分の役割に気づき、ユウスケと夏海も納得する。

「ふむ、大体解った…店に案内しろ。」

「え？自分のお店の場所が解らないなんて…変なの。」

—解ったものの店の場所が解らないので、士はのび太に道案内をさせた。

—和菓子屋

—それなりに年季が入ってる店だが、さりとて汚いわけではなく、割と小綺麗であり、店内には美味しそうな色とりどりの和菓子が並んでる。

一ちなみに付け加えると、最近店長がぎっくり腰で入院しており、士はその代理の店長らしい。

「で？何か欲しいものでも…。」

「ドラ焼きください!!」

「…って、早いな、オイ!」

一ドラえもんの注文のあまりの速答ぶりに思わず士はツツコミを入れた。

「ロボットなのに物を食べれるなんて…。」

「一体どうなってるんでしょう？不思議です。」

一ユウスケと夏海は苦笑しつつも、士が手渡す紙袋に詰まった沢山のドラ焼きを嬉しそうな顔をして見つめるドラえもんになんか感想を漏らした…その時だった。

「やあ、士…また会ったね?」

「海東!?!…何の用だ?」

一トレードマークの帽子をかぶった爽やかな笑みを浮かべる青年…士達と同じく異世界を旅する怪盗・海東大樹が店前の電柱に腕を組んでもたれかかりながら士達に声をかける。

「僕に『ソレ』くれないかな?タヌキくん…。」

「だ、誰がタヌキだっ！？僕はネコ型ロボット！！それにドラ焼きは渡さないぞ！！」

「だからドラえもん！落ち着いて！！」

一海東のタヌキ発言にやはりキレるドラえもん、のび太が彼を諫める、突然海東は指鉄砲を作ってドラえもんに向ける。

「生憎だが今はお腹いっぱいだから遠慮しておこう…僕が用があるのは君の『四次元ポケット』さ…！！」

「「な…なんだって！？」」

「「「？」」」

一海東の言う『四次元ポケット』なるワードがイマイチ理解出来ない士達をよそに、激しく動揺するドラえもんのび太。

「勿論話し合いで解決する問題とは思って無いさ…スマートじゃないが腕づくでいただくのでしょうか！」

「ギャーッ！？銃だ！！」

「撃たれる！！なにか道具！道具！」

「うわ！？ポケットからガラクタ出しやがった！」

一ドラえもんのび太は海東が出した銃の様なものにびっくりしながら『四次元ポケット』と呼ばれるお腹のポケットに手を入れてガ

ラクタをポンポン出したため、士もびっくりした。

―海東は銃…否、ディエンドライバーにカードを装填し、空高くに掲げ…。

「変身ッ！」

「KAMEN―RIDE…DIEND！」

―引き金を弾いた次の瞬間、海東は灰色の仮面やスーツに身を包み、頭やボディに『ライドプレート』と呼ばれるカード状のものが突き刺さると同時に仮面や鎧やスーツに鮮やかなシアンと黒が浮かび上がる…。

―これが海東大樹のもう一つの姿、仮面ライダーディエンドである。

「か…変わった!？」

「何だ、あれは!!」

『フフン…さあてと、ネコ型には同じネコ科でいこうか!』

―ディエンドは二枚のカードを取り出してディエンドライバーに装填し、放つ。

「KAMEN―RIDE…TAIGA！」

「KAMEN―RIDE…NISHIKI！」

―ディエンドライバーから召喚された者…。

『僕は英雄になるんだよ……!!』

一カードリーダーがついた斧型の白召斧『デストバイザー』を片手に、底知れぬ野心をその胸中に秘めた白銀の白虎・仮面ライダー・タイガ。

『へへッ!』

一三節棍の様な武器『音撃三角・烈節』トライアングルを携えた虎と鬼を組み合わせた様な音撃戦士・仮面ライダー・西鬼。

「どうしよう! なんか知らないけど虎みたいな奴が……」

「あわわ!!」

一士達はディエンドがディエンドライバーを介してカードを使用することでライダーを召喚することが出来るのを知ってるため別段驚きもなかったが、この世界の住人であるのび太とドラえもんには充分に『未知の恐怖』だった……ちなみにドラえもんは未だにポケットからガラクタを出しまくってた。

『フン♪さあ……最後の警告だ、痛い目に遭う前にポケットを僕にくれないかな?』

一余裕があるかの様に、鼻歌混じりにディエンドは最終警告を傳達するが……。

「やれやれ……別の世界に着いた早々、海東おまえと戦うハメになるなんてな……行くぞ、ユウスケ!」

「よしきた！」

「士君！頑張ってくださいね！！」

一士はクールな自分をさらにクールダウンさせたかのような溜め息混じりで腰に『ディケイドライバー』と呼ばれるベルトをつけ、ユウスケは腰に『アークル』というベルトを出現させる。

「ちよつと！危ないですよ！？」

「大丈夫ですよ、私や士君、ユウスケはああいう輩相手には慣れますから♪」

『…何気にヒドい言い方だね、夏メロン。』

一ドラえもんが叫ぶが、夏海は勿論、士とユウスケはこれまで様々な世界で色々なライダーや怪人と戦ってきたので『大丈夫だ』と軽く説明…戦いの方法とは勿論…。

「変身ッ！！」

「KAMEN-RIDE：DECADE！」

二人の声が重なり、その姿が変わる…。

一士がディケイドライバーにカードを装填した瞬間、十の紋章が現ライダーズクレストわれて士の姿と重なると、灰色の仮面とスーツが装着され、頭にライドプレートが突き刺さる。

一同時にエメラルドグリーンの眼が輝き、鎧やスーツに鮮やかなマゼンタと黒が浮かぶ：そして『世界の破壊者』と忌み嫌われる者・仮面ライダーディケイドとなった。

一ユウスケは素早く変身ポーズを取り、アークルから眩い光が放たれると同時にクワガタを模した金のツノと赤い眼がついた仮面、各所に古代文字が彫られた烈火の如き赤い鎧に黒いスーツを纏う超古代の戦士・仮面ライダークウガと化した。

「わー！？こっちもピンクのとクワガタみたいなのになったよ、ドラえもん！！」

「あ：あなた達は何なんですか！？」

『ピンクじゃなくてマゼンタだ！！メガネ！！』

「ヒドッ！？」

一ディケイドとクウガを見えますますパニクるのび太とドラえもんを一喝し、改めて名乗る。

『通りすがりの仮面ライダーだ：覚えておけ！』

一ディケイドは腰から『ライドブッカー』というアイテムを取り出して、剣型のソードモードに変形させた。

『行くぞユウスケ！あの海東今日こそとっちめる！』

『応よ！！』

『上等だよ：かかって来い！！』

『『『『うおおおおおッ!!』』』』

—新たな異世界にてついに始まった戦い…だが彼らは気づいてなどいなかった。

—この戦いが始まりに過ぎず、後に大きな戦いとなるなんて…今はまだ知るよしもなかった…。

第一話―THE DORA YAKI―（後書き）

第一話：ついに始まりました、他の連載まだ終わっていないのに：創作意欲を抑制出来ぬ愚かな作者をお許し下さい（汗）

久しぶりに士達の話を書くこともあり、以前の『クレヨンしんちゃんの世界』でのギャグ、ノリやテンションを書いていけるか不安ですが：少しずつそれを『ドラえもんの世界』で戻せたらなと思います、今後ともよろしくお願いします

今回はドラ達をも巻き込む、『ドラえもんの世界』はちゃめちゃフアーストバトル・開始です！

それでは、柳雨でした！

第二話 仮面の戦士達とネコ型ロボットー（前書き）

ネコ型ロボットを名乗るドラ焼き好きなロボット・ドラえものの『四次元ポケット』を狙ったディエンドⅡ海東大樹、しかしそれをさせないのがディケイドⅡ門矢士とクウガⅡ小野寺ユウスケ！ついに
激突！

第二話 一仮面の戦士達とネコ型ロボット

『『『『うおおおおおおッ!!』』』』』

ーディケイド・クウガ、そしてディエンド・タイガ・西鬼、それぞれのライダーが激突し、大乱闘に発展する。

『邪魔はさせないよ、士! 四次元ポケットは僕のものだッ!!』

『四次元だか二次元だか知らねーが、お前の邪魔がしたくなっとな!』

ーディエンドとディケイド…海東大樹と門矢士の二人はたまに共闘することもしばしばあるが、基本は互いに我の強い性格だけに反りが合わず、会う度会う度、何かと敵対していた（むしろ喧嘩に近い）。

『ガアアアアアア!!』

『ハッハッー!!』

『ム!?!』

ーディエンドと殴り合いをしていたディケイドの背後から突如、ディエンドが召喚したタイガと西鬼が迫り攻撃を仕掛けてきたが…。

『お前らの相手はオレだアッ!!』

『『ぐあっ!?!?』』

『ナイス、ユウスケ!』

『…やるね、小野寺君。』

一だがそうは問屋が卸さんぞ、と…言わんばかりにクウガがさらに背後から飛び掛かり、タイガと西鬼にヘッドロックを仕掛けてディケイドから引き離す、それを見たディエンドは忌ま忌まし気に賞賛を送った…。

「い、一体何が起きてるんだ…?」

「いきなり変身したけど…もしかして、ヒーロー?」

一方、状況が全く飲み込めないドラえもんとび太はただただ彼らの戦いに圧倒されるだけだった。

「頑張ってください! 土君! ユウスケ!!」

『ええい…やかましいぞ、夏ミカン。』

『まあまあ、せっかく応援してくれてんだし♪』

—そして夏海は二人の強さを充分に知ってるので自分は彼らを信じての応援に徹していた。

「あ…あの…あの人は一体…?」

「あ、さっきの眼鏡くん…タヌキさん?」

「ドラえもんだよ！タヌキはやめてッ！！」

一先程ちよつとした言い争いになってた自称・猫型ロボットのドラえもんはまたタヌキ呼ばわりされ、憤慨した。

「あの人達は『仮面ライダー』です。」

「『仮面ライダー』???」

一質問の答えを返した夏海の聞き慣れない言葉『仮面ライダー』にキョトン、とする二人。

一曰く、仮面を纏い、敵と己の運命に日々立ち向かい続ける戦士達の総称。

一曰く、善と悪、二つのタイプがおり、様々な世界に存在している。

一曰く、ディケイドⅡ門矢士、クウガⅡ小野寺ユウスケ、ディエンドⅡ海東大樹もライダーであり、それぞれの目的のため旅をしていること。

「知らなかった…そんな人達が居たなんて…。」

「ぼくもだよ、未来でもあの人達みたいなの見たこと無いもの。」

一夏海の語った仮面ライダーに関する事に二人は圧巻されたという…。

『うおりゃあああ!!』

『ぶべらッ!?!』

『はべらッ!?!』

—その頃、クウガはヘッドロックしたタイガと西鬼を投げ飛ばして、付近のゴミ捨て場にぶつける。

『『グオオオオオ!!』』

『STRIKE—VENT』

『あ、やっぱり怒った?』

—誰だって怒る…頭についたバナナの皮やら魚の骨やらを払いのけていきり立つタイガはデストバイザーのカードリーダーにカードをスラッシュし両腕に巨大な鉄爪『デストクロ』を、西鬼は音撃三角・烈節を分解して三節棍型になったものを装備し、頬をポリポリ搔いてるクウガに向かって襲いかかる。

『グラァッ!?!』

『フンヌッ!?!』

(武器持ちか…ちょっとヤバいな…ん?これだ!)

—二人が急に武器を持ちはじめたため、攻撃の面において自分が一

番不利と考えたクウガはゴミ捨て場にあったビール瓶を拾い、壁に叩きつけて割る。

『超変身ッ！』

一瞬間、クウガの身体に重厚な銀と紫の鎧が装着され、眼は赤から紫に、そして手に持ってたビール瓶は瞬時に大剣型の武器『タイタンソード』に：マイティフォームからクウガⅡタイタンフォームへのフォームチェンジが完了した。

『これで条件は同じだな、ウリヤアアアッ！！』

『ギャッ！？』

『クッ：！』

一クウガⅡタイタンフォームはすかさずタイタンソードを振るい、斬撃を西鬼に浴びせる。

『どっからでもかかって来い！！』

一クウガはタイタンソードを二人のライダーに突きつけ、堂々とした態度で戦いを臨む姿勢を見せたが内心：。

（どうかオレに不幸が訪れませんか！どうかオレに不幸が起きませんように！どうかオレに不幸が訪れませんか！）

一：クウガは何かと不幸体質でやられやすい、または何かに巻き込まれやすいため（主な原因は某破壊者）、ひたすら不幸が起きないことを余裕で流れ星に百回願えるくらいのスピードの早口で願って

単身、タイガと西鬼に挑んだ…。

一方、ディケイドとディエンドは…。

『そういえば…海東と一対一で闘うことはあまりなかったな？』

『うん、確かに…同感だね。』

ディケイドはライドブッカードを銃型のガンモードに変形させてディエンドに、ディエンドはディエンドライバーをディケイドに、互いの銃口を向け合て牽制しながら語る…。

一利害の一致で共闘したり、怪人が乱入してきたり、ディエンドがライダーを頻繁に召喚したり…そういった状況が多いため、この二人が本格的な一対一はそうそう無い^{タイマン}ため、お互いどこか愉快そうにしている自分がいたという…。

『だがな、勝つのはオレだッ!!』

『ATTACK—RIDE…BLAST!』

『聞こえないな？この僕だろッ!』

『ATTACK—RIDE…BLAST!』

一瞬間、ディケイドとディエンドはそれぞれのドライバーにカードを装填、二つの銃撃技、『ディケイドブラスト』『ディエンドブラスト』がほとんど同じタイミングで発動され、威力の関係で相殺される。

『チイツ…!』

『クソッ…!』

一互いに失敗したことに舌打ちし、そのまま二人はトリガーを弾いて銃口から光弾を絶えず放ちながら横走りをはじめた。

「す…スゴイや…!!」

「のび太君! 危ないって!」

一ドラえもんの制止も耳に入らないくらいのにび太は思わず魅せられていた…。

一姿を変え、自分達とは明らかに異なる力や道具を使って戦う…そんな『強さ』に。

一だが、のび太はもちろん、ドラえもんはまだ知らない…彼らがどんな思いをして、どんな運命に弄ばれてその力を手に入れてしまったのかを…。

『どうした! 海東! その程度か!?!』

『まだまだ…って、ん?』

一そうとは知らずに、銃撃戦を繰り広げているディケイドとディエンド、その終止符は意外な形で終わりを告げた。

『『ぐがぁぁぁぁ!?!』』

『な…何…びゅあ!?!』

一なんと、いきなりタイガと西鬼が吹き飛んできたため、ディエンドは予期せぬ事態に対応出来ず、二人と激突して仲良く地面を転げ回った。

『士!』

『よう、たまにはやるな? ユウスケ。』

一どうやら一足先に片付いたクウガTFのおかげのようだ、ディケイドはクウガと向き合う。

『た、「たまには」は余計だろッ!? 全く…』

『事実だろ…やれやれ。』

一素直にクウガの勝利を喜ばないディケイドだが、二人は小さく笑い、互いに手の平を出してパンツと、威勢よく叩いたタッチをした。

「「やった!」」

「士君! ユウスケ!」

一のび太とドラえもん、そして夏海は無事、二人が勝ったと思い、その場で跳ねたりしながら一緒にハシャイだが…それは『間違い』だった。

『まだだ…僕にはまだ切り札^{カード}がある!』

『し…しまッ…!?!?』

一よろめきながらカードを装填するディエンドを見てディケイドとクウガは慌てるがもう遅い…。

「ATTACK—RIDE:CROSS—ATTACK!」

『グララァッ!!』

『ハァッ!!!』

一ディエンドは召喚したライダーに『必殺技を使用させる』効果を
持つ『クロスアタック』を使用、同時にタイガと西鬼が必殺技を
発動した。

『ガァァァァァァ!』

「FILL—VENT」

『ハァァァァ…ハッ!!』

『うわああああ!?!?』

一タイガは白虎型の契約モンスター・デストワイルダーを召喚…デ
ストワイルダーはディケイドを地面へ引きずってタイガへと向かい、
やがて空高く放り投げられたディケイドをタイガがデストクロード
突き刺し、結晶爆発が巻き起こす『クリスタルブレイク』が炸裂。

『いらっしゃい!』

『何のこと…ぐはああッ!?!』

一西鬼は三節棍状から再びトライアングル状に戻した烈節を音叉で叩いて発動させる『音撃響・偉羅射威^{いらっしやい}』でクウガに清めの音を叩き込んだ。

『がはああああ!!』

「二人共…!!」

一ライダーの必殺技をまともに食らったディケイドとクウガはブツ飛ばされ、地面を何度かバウンドしながら壁に激突したため、夏海は思わず目を伏せた。

『さて…邪魔者はダウンした…四次元ポケットをもらおうか?』

一ディエンドは視線を倒れた二人から獲物^{ドラえもん}とお宝^{ポケット}に移し、ゆっくりと一歩一歩近づいてくる。

「そんな…ドラえもん!何か道具出して!!」

「ぼくのポケットは誰にも渡さないよ!えーと…えーと…」

（(またガラクタ出しとる…)）

一ドラえもんがポケットから役立つ道具を探しながらポンポンガラクタを排出する様子を倒れてるディケイドとクウガが眺めていた…何気に余裕である。「あった!これだ!」

一ドラえもんはここでこの危機を乗り切る起死回生のひみつ道具を

見事引き当てた、その名は…。

「『時限バカ弾』ゝ！！」

一ドラえもんの間延びした特徴的かつ説明的な声と共に出されたのは手の平サイズ小さな時計型の道具だった。

『『『時限爆弾！？』『』』』

一聞き間違いか早とちりか…：ディケイド・クウガ・夏海・ディエンドはドラえもんが出したそれを『時限爆弾』だと思い仰天した。

『よ、よしたまえ！？そんな爆発物持つてるなんて！！本当に子守り用ロボットか！？』

『お…大バカかてめえ！オレまで吹き飛ばす気かッ！？ユウスケと海東はともかく！！』

『おいコラ士アッ！？早速不幸だアアアゝ！！』

「考え直してください！」

一…四人から激しい抗議が出たがドラえもんは止まらない。

「五秒後にセツト…そーれッ！」

『『『『うわあああああああ！？』』』』』

—タイマーをセツトし、爆弾をライダー達に容赦なく投げつけた。

『ユウスケ！』

『離せー！いや、離すなー！わああああ！？』

—尚、素早く起き上がったディケイドはクウガを掴んで起こし、非常に非情なまでにクウガを爆弾の方へ突き放した。

『『爆発するー！！』』

—そしてクウガとディエンドの悲鳴と共に…。

—ドカーン！！

—…という、派手な爆発音ではなく…。

—ポンッ…。

『『『…へ？』』』』

—拍子抜けしたマヌケな破裂音が聞こえた、次の瞬間…。

『『ズツパッパのチンチロリン♪』』

『『クルクル回ってホーイホイッ！！』』

—…何故か、むしろ頭がクルクルパーなことを言いながらクウガ・ディエンド・タイガ・西鬼がラリった動きや奇妙な踊りをしていた。

『どわゝははははははははははは！！なんじゃそりゃあああああ
！？がはははははは！！』

「アハハハハハ！！ユウスケに大樹さんったら！！ヒーヒー！！」

『『『…ハッ!?!』』』』

「まるで『光家直伝・笑いのツボ』を押されたかの様にゲラゲラ笑い転げるディケイドと夏海のバカ笑いでしょうやく我に返ったバカ四人。」

「『時限バカ弾』はタイマーセットの後に相手に投げ、爆発に巻き込まれるとみんなバカになっちゃうんだ!」

『「時限バカ弾」…んなアホな名前の爆弾なんてありかよ…プヒヒヒ!!!」

「ドラえもんの道具の説明を聞いてツツコミ、思い出し笑いをするディケイドであった…。」

『ふざけんなアアアアア!?! よくもハジかかせたな!?! このウスラデブッ!!!』

「で、でぶ!?! 失礼な! 助けてあげたのに!?!」

『どこがじゃあああああ!?!』

「一時的とはいえ、モノホンのバカになってしまったクウガは怒りの咆哮を上げ、ドラえもんにも口汚く暴言を吐き散らした。」

『…よくもこの僕のクールなイメージをブチ壊したな…?!』

「「…へ?」」

「ディエンドは今までにない屈辱を直で味わい、身体をワナワナと

うち震わせ、次の瞬間。

『…野郎！！もう許さねエツ！！』

「「わー！？キレたー！！」」

「ちょ…！大樹さん！語調まで変わってますよ！？」

一怒りと羞恥からマジギレし、荒々しい語調になったディエンドがディエンドライバーをドラえもんとのび太の二人の足元を狙って乱射・乱射・乱射、二人は踊るように脚をバタつかせて回避、ディエンドのあまりの豹変ぶりに夏海もビックリしたという。

「ドラえもん！！早くまた道具を出さないと確実に消されるよオオオオ！！ぎひゃあああ！？」

「待っ！待って！待って…！今度はこれだ！『くすぐりノミ』く！ええいッ！！」

一弾丸と共にダンスを踊るのび太に急かされてドラえもんはまたポケットから道具…『くすぐりノミ』なるノミが描かれたラベル付きの缶詰を開封し、激怒の炎を燃やした修羅・ディエンド達に向けると…。

『グッ！？これは…だーはっはっはっは！！身体中がくすぐったいよ！！あひゃひゃひゃ！！』

『うひゃひゃひゃ！！』

『ゲラゲラゲラゲラ！！』

ーディエンドの攻撃の手が止まり、タイガ・西鬼と共に身体を無茶苦茶捻ったり振ったり、身体を掻きむしったりしながらゲラゲラ笑いだした。

『…こ、今度はなんだ？』

「『くすぐりノミ』！本物のノミと同じサイズの小さなノミロボットが相手の身体に入り込んで笑わせるんだ。」

『丁寧な説明ありがとよ。』

ー尋ねたクウガの疑問をよい子にも解りやすい解説をするドラえもんがアツサリ解決、ディケイドはやや感心した様子で礼を言う…。

『ハアハア…わ、笑い過ぎて疲れた…。』

『『…ガクッ。』』

ー笑い疲れ、地面にへたり込んだり倒れたりするディエンド達…。

『よし…チャンスだ!!』

『F I L L - A T T A C K - R I D E ∴ D E ・ D E ・ D E ・ D E
C A D E !』

ーディケイドはこの期を逃すまいとカードをドライバーに装填した直後、目の前にいくつものカード型のビジョンが浮かび上がり、地面を力強く蹴って宙空を高らかに舞い、脚をディエンド達に向けて突き出す。

『ハアアアアアアッ！！』

『イギヤアアアアアアッ！？』

『あー！？僕の手駒が！』

一カードのビジョンを貫く様にまっすぐに飛び蹴りを放つ必殺技『デイメンションキック』がタイガにクリーンヒット、大爆発を起こして消滅する。

『続けてオレだアッ！！おりゃあああッ！！』

『ぐええええッ！？』

一クウガはタイタンソードを強く握り締め、西鬼に突撃と共にタイタンソードを突き刺す必殺技『カラムיתיタイタン』を命中させ、封印エネルギーを注ぎ込むと同時に西鬼が跡形もなく爆散した。

『う…嘘だろ！？ンなアホな！！』

『そのアホなことでお前は負けたんだよ。』

『形成逆転だな♪』

一未だに信じられない様子でうろたえるデイエンドに『これは事実だ』という非情な現実を突きつけたデイケイドとクウガ。

「やりましたね！ありがとうございます！雪ダルマさん！！」

「ドラえもんだアアアア！いい加減覚えろオオオオ！！」

「落ち着いてよドラえもん！」

一喧嘩を売ってるのやら、礼を言ってるのやら…夏海の名前の言い間違いでブチ切れたドラえもんはのび太に羽交い締めされてしまった。

『『覚悟はいいな？海東。』』

『ギャアアアア！！お助け〜！！』

一拳をバキバキ鳴らしながら近づくディケイドとクウガ、特に超絶サディストなディケイドの性格を熟知しているディエンドは恐ろしさのあまり、プライドもクソもかなぐり捨て、情けない悲鳴を上げて二人から慌てて離れ、透明化の効果を与える『ディエンドインビジブル』を発動させようとしたその時。

—…それは出来なかった、何故なら…。

『オーロラ…？一体何が…グアツ！？』

—ディエンドの目の前に灰色の歪んだオーロラが現れた直後、ディエンドはオーロラから飛び出した何者かの棒の様な武器できなり腹を突かれ、衝撃で吹き飛ぶ…。

『海東！？』

—予想外の展開にさすがのディケイドも動揺せざるを得なかった…。

『ユウスケ！気をつけ…!!?』

―ディケイドはクウガに警告をしようとしたが『遅過ぎた』。

『…ゴハアッ!!』

『ユウスケ!?!』

―横を振り向いた瞬間、見えたものは何者かにやはり棒で殴られ、壁にメリ込み、マイティフォームに戻ってグツタリしているクウガの無残な姿だった。

「な…なに、あの怪物!?!」

「鳥…人間?」

（『アレ』は…まさか!!）

―『怪物』、確かにそう叫び情けない声を出すのび太と怪訝な顔になるドラえもん…ディケイドはオーロラから現れた鳥型の怪物、否、『怪人』のある『部分』に着目した。

―それは越元に付けられた羽根と貝殻を組み合わせた様な独特のデザインのリボン…。

―小柄だが派手な羽飾りを頭に差し、手には棒型の武器、細長いクチバシを口に生やし、身体は金の羽毛で覆われ、どこか貴族の様な高貴な雰囲気、服装をしている凶悪な眼つきの鳥型の怪人、奴が言い放った次の言葉でディケイドの予想が『確信』に変わる

『ヒトはヒトのままでもいい…。』

『バカな…アンノウンだとッ!？』

—アンノウン、それは特別な力を持つ人間…例えば超能力者といった存在など、人として超越した『進化』を遂げた者達を狙って駆逐・抹殺する恐るべき神々の使徒たる怪人…。

—本来ならば『アギトの世界』の怪人であるはずのアンノウンが何故ここにいるのか？ディケイドは疑問を感じながらもライドブッカーを剣型のソードモードに変形させてアンノウンに向けて構える。

『いきなり派手なことしてくれるじゃねえか？派手鳥野郎。』

『人間に進化は必要無い…死ねッ!!』

—挑発するディケイドに対し、鳥のアンノウン…ハチドリ型のハミングバードロードIIネクタルウォーレ・ドゥクスが物騒なことを言いながら棒を構えて飛び出す…。

—ネコ型ロボット・ドラえもん、少年・のび太が住むこの世界で起きた戦いがさらなる戦いを呼んだのかもしれない…。

—突如乱入したアンノウンとの戦いに発展してしまうが破壊者・デイクイドに迷う暇などなく、再び戦いの最中へと飛び込んだ…。

第二話 一仮面の戦士達とネコ型ロボットー（後書き）

第二話：ようやく投稿出来た二話目、なかなか昔の様にはいきませんね：

いよいよ始まった戦いで善戦するもユウスケと海東は：彼らが不幸になるのはこの小説の宿命であり、士のサディストな振る舞いはデフォです（鬼）

本作にてドラえもんが初めて使ったひみつ道具はマイナー？の部類に入る時限バカ弾とくすぐりノミ、コミック版『ドラえもん』のび太のロボット王国^{キングダム}』から取りました、バカになってしまったりブチ切れたり：海東ファンの皆様ゴメンなさい（汗）

未だに名前を覚えてもらえないドラえもん：特にユウスケの『ウスラデブ』発言がヒドイ、尚漫画でもドラえもんはスネ夫の口からミーちゃんに告白する前に言われ『だめ：とてもだめ：』と泣きながら自信をなくしてました

最後に現れた謎のアンノウン・ハミングバードロード、『ネクタールウォーレ・ドゥクス』という名前はラテン語で『蜜食動物の指導者（または貴族）』という意味でつけました

次回はディケイド達とハミングバードロードとの戦いに突入、それでは！柳雨でした！

第三話 一世界の破壊者VS神々の使徒 一（前書き）

突如乱入してきた謎のアンノウン・ハミングバードに襲撃されたデイクイード達、ライダーの世界ではないこの世界で現れたため戸惑い
つつも彼らは再び戦うために立ち上がる

（今回の話には特別ゲストが登場します）

第三話 一世界の破壊者VS神々の使徒一

『シェアアア!!』

『なんのオツ!!』

「ATTACK—RIDE…SLASH!」

一突然オーロラから現れて乱入してきたハミングバードロード||ネクターウォーレ・ドゥクスは棒状の武器『風読のシレイラ』を振るうが、ディケイドはディケイドスラッシュで応戦した。

『シャウツ!!』

『チイツ…速いッ!?!』

一自分の剣捌きよりも素早く振るわれるハミングバードの棒捌きに翻弄され、段々押され気味になるディケイド…そして。

『シャオウツ!!』

『ゴブツ!!…がッ!?!ゲホ…ゴホ…!!』

「士君!?!」

一シレイラで喉・腹への二段突きを食らったディケイドはその場に崩れ落ち、喉をやられたことで呼吸が上手くいかずに酸欠で苦しむ。

一さらにはハミングバードの背後から再びオーロラが出現…中から

複数の何かが飛び出す。

『ガアアアアアア！！』

『ホホホホホホ！！』

『クアアアアアア！！』

「また鳥のお化けだ！？」

『こ、こんなに！？』

一中から戦士や神官の姿をしたようなカラス型・フクロウ型・ハヤブサ型のアンノウン：クロウロード、オウルロード、ファルコンロードの3体が翼を羽ばたかせながら飛翔し、のび太やドラえもんを驚かせる。

『そんな力を持たずに我々に管理されていれば良いものを…死ぬがいい、過ぎた力を持った哀れなヒト共よ…！！』

一ハミングバードはクロウ達を率いて空中に浮かびながらディケイド達を見下ろし、シレイラでの突きをまた食らわせようと急降下し始める…。

『やらせない！空気砲〜！ドカーン！ドカーン！ドカーン！ドカーン！』

『うがごッ！？』

『』『ギキャッ！？』『』

一しかしドラえもんは瞬時にポケットから筒みたいな道具『空気砲』を手にはめ、空気の弾丸を放ちアンノウン達を迎撃…全員落下した。

『おお…！？なんだ今の…。』

『空気を弾にして撃ち出す武器か…？』

（ふふ…ますます欲しくなったよ、四次元ポケットを！！）

一ドラえもんの道具がマヌケなものばかりではなく戦うための『武器』もあると知り、地に伏したクウガ・ディケイドはその性能に驚き、ディエンドはますます四次元ポケットをこの手で奪いたくなつたという…。

『やるじゃねーか、ド饅頭。』

『ドラえもんだよ！大体「ド」と「ン」しか当たってないじゃないか！？もう！怒るぞ！！』

一ディケイドは人に助けられておいて相変わらず彼を正確な名前で呼ばないどころかさらに変な名前で呼んだためドラえもんはキレた。

『どうしてこの男は敵を自分から増やそうと考えるのかなあ？僕には理解し難い…やれやれ、そろそろ立つか、小野寺君。』

『オレもそー思う…あいててて…。』

「…随分余裕ですね、二人共…。」

一ハミングバードの不意打ちで倒れてたディエンドとクウガはディケイドにアレコレ感想を述べつつ、ひょいっと立ち上がる：ダメージの割には二人共余裕が感じられたため夏海は呆れた様子だったという。

『フン：貴様ら如き、私が直接手を下すまでもないな：やれ。』

『『ガアアアアアアアアアア！！！』』

一ハミングバードは高見の見物のつもりか、自分は遙か上空へ飛んで腕を組んで地上を見下ろしながら待機、後は全て部下のクロウ達に任せてディケイド達に彼らをけしかけた。

『チッ！揃いも揃って手羽野郎だらけか：「電王の世界」や「しんのすけの世界」でのアイツを思い出すな。』

『いやいや！アンノウンとジークを一緒にするなよ！？』

一ディケイドはクロウ達鳥型アンノウンを見て一度目は『電王の世界』で、二度目は『しんのすけの世界』で再び出会った白鳥型のイマジンにして高貴なる王子・ジークを思い出す。

『そうだ：手羽野郎といえば、まだこのカード使ったことないな？：試してみるか。』

「ATTACK－RIDE：KORIN MANWO JISSI
TE！！！」

一ディケイドはライドブッカーから一枚のカードを引き抜き、ディケイドライバーに装填すると突如、何やら意味深な電子音が聞こえ

たと同時にその姿を瞬時に変えた…。

—まずは白い仮面と地味な装甲に黒いスーツの簡素な姿の仮面ライダー電王Ⅱプラットフォームに変わり、すぐさまコバルトブルーの鳥の翼を模した眼がついた仮面と白鳥の如く純白な装甲が装着され、そしてスーツが黒から眩いばかりに輝く黄金に変わり、気高き鳥の鳴き声と共に一瞬だけ背中から翼状のビジョンが展開され、周囲に白い羽根がヒラヒラと優雅に舞い降りる…。

『降臨…満を持して…。』

—まさかのディケイド電王Ⅱウィングフォーム、ここに参上…。

『「姿が変わった!?!」』

—カードの力で他のライダーの姿に変えることが出来るディケイドの能力にのび太とドラえもんは素っ頓狂な声を上げてますます驚く。

『さてと、行くぞ…ユウスケ、海東、あの鳥共を親玉もろとも焼き鳥にしてやる。』

「ATTACK—RIDE…DEN—GASHER!」

『その姿で焼き鳥言うか。』

『何故だろう…中身のせいか気品のかけらも感じられない…』

—もっと言ってやりたいと思うが渋々クウガとディエンドは電王専用武器・デンガッシャーのブーメランモード&ハンドアックスモードを出してるディケイド電王WFに協力した。

『ちょっとそれ借りるよ！超変身！！』

『あー！？ちょ、ちょっと！！』

「色が赤から緑に！？」

一クウガはドラえもんから空気砲を借りて、赤いマイティフォームから緑のペガサスフォームへと変わり、さらに空気砲はペガサスボウガンと呼ばれるボウガン型の武器とへ変化した。

『さてと、反撃を始めようか？』

『クアアアアアア！！』

一D電王WFは滑空しながら襲い来るファルコンに向き合い、武器を構える。

『フッ！ハッ！オラアッ！！』

『ガッ！？ゲェッ！ゲベェッ！！』

一しかし、軽ろやかな美しい動きで柔軟にかわし、舞う様にハンドアックスとブーメランでファルコンを切りつけて地面に叩きつけた。

『そしてトドメだ…ハッ！！』

「FINAL—ATTACK—RIDE∴DE・DE・DE・DE
NO！」

『クアッ！ガハアッ！？』

『その動きは想定済みだ。』

―カードを装填後、D電王WFはブーメランを投げつけるがファルコンは回避、しかしそれに気を取られまるで飛翔するかの如く跳躍し、ハンドアックスを振るうD電王WFに気づかなかった。

『はああああああ!!』

『グギヤアアアア!?!』

―ハンドアックスによる断撃と戻って来たブーメランの挟み撃ちにより、ファルコンは爆砕された…これがD電王WFの必殺技『ロイヤルスマッシュ』である。

―一方、クウガは。

『ホアアアアアア!?!』

『いくら動きが速くても…。』

―空中を縦横無尽に翔けるオウルとは対照的に地上でただペガサスボウガンを構えてるだけのクウガPF：しかし、彼はこのままカカシになる気はない。

―ペガサスフォームは視覚・聴覚などを最大限に研ぎ澄ませることで、どんなに素早い敵をも射抜くことが出来る『超感覚』が得られる、しかし反面、このフォームを維持する時間が限られてる…いわば短期決戦向けのフォームなのだ。

『…そこだ!』

『ホゲアアア!?!』

—その場で身体を捻り、背後へ向かって必殺の空気弾攻撃『プラストペガサス』を放ち、見事、オウルに命中、撃破した。

—同じく、ディエンドも…。

『カラスならカラスらしく、ゴミでも漁っていたまえ!』

「ATTACK—RIDE…BLAST!」

『ガガアアア!?!』

—クロウがいくら飛ぶスピードが速くとも、ホーミング機能を持つディエンドのディエンドブラストには何の意味も無く、易々と撃ち落とされた。

『ガ…ガルアアアアア!?!』

『フツ…さすが鳥頭、学習能力も皆無ということか。』

—ディエンドの攻撃は勿論、ディケイド相手で鍛えた挑発の効果もあってか、完全にいきり立ったクロウの動きも単調になり、ディエンドはディエンドライバーにカードを装填しながらお得意の高速移動でアツサリ回避した。

『食らえ…!』

「FINAL—ATTACK—RIDE∴DI・DI・DI・DI
END!」

『ガルゴブアッ!?』

—ディエンドライバーの銃口からカードのビジョンが幾重にも出現した後、『ディメンションシユート』がクロウを爆散させた。

『『ハッ!!!』』

—三人は体勢を立て直し、構えた∴尚クウガは時間の関係でペガサスからマイティに戻した。

「凄い∴仮面ライダーって凄いや!」

「どうですか? エヘン!」

『なんで君が威張るの?』

—ディケイド達の戦いにキラキラと目を輝かせるのび太に対して傲慢するかのよう胸を張る夏海、そんな彼女にジト目なドラえもんであつた。

『我が同胞が貴様らヒト如きに∴認めぬ、私は認めぬぞオオオオオオオ!』

『な∴コイツ!! さっきよりも速ッ!?!? ぐわッ!』

『ユウスケ!! どわアッ!?!』

『君達！！うぐうっ！？』

一部下を倒され、怒り狂ったハミングバードは最初に三人を強襲した時よりもさらに倍のスピードを出してまるで弾丸の様な超高速飛行をしながら突撃したり、シレイラを振り回して薙ぎ払ったりした。

『畜生！！アイツの飛行能力は厄介だ！！なんとか地面に引きずり降ろすには…。』

『ボクに任せて！』

「ドラえもん？何を…。」

一ハミングバードの厄介な超高速飛行攻撃のダメージでD電王WFから元の姿に戻ったディケイドは悔しがるがこの時、ドラえもんは何かをポケットから出した。

『「なんでも空港」く！』

『く、空港…？この小さいのがかい？こんなので何が起き…。』

一ドラえもんは空港のミニチュアが付いた滑走路を模したシートの様なものを地面一杯に広げて置いた…その不可解な行動に疑問を抱くディエンドだったが…。

『何イイイイイ！？か、身体が勝手に…！？』

『…効果は抜群だア…ッ！？』

一なんと、飛行してるハミングバードは自分の意思とは無関係に突

然何かに誘われる様に、まるで飛行機の如く『なんでも空港』の滑走路にキチンと着陸したためディエンドとクウガは声を揃えて仰天する。

『これは鳥でも虫でも空を飛んでるものならなんでも着陸させることが出来るんだよ!』

「便利な道具ですね。」

「そうでしょ! オッホン!」

『何故お前がえぼる? メガネ。』

一今度は夏海がドラえものの道具に感心したため、のび太が威張るがディケイドに即座にツツコミを入れられた。

『しかしこれ、で…なんだこりゃ?』

一ディケイドがハミングバードに攻撃しようとしたその時、突如『なんでも空港』へ、頭に三本の毛を生やし口がタラコ唇になってるパッチリお目々の白い変なものが舞い降りた。

『おい、オバケなんか用は無いぞ! 帰れ!!』

『降りたくて降りたんじゃないやい! そんなものを広げているのが悪いんだ!!』

()(…なんでアレがオバケって解るんだろう?)()()

一ディケイドはオバケ(?)に文句を言い、オバケ(?)もプリプ

り怒りながらフワリと飛んで行ってしまった…この場に居た者全員が何故ディケイドがオバケ(?)と解ったか理解不能だった。

—さらには帽子を株ってホウキに跨がる黄色い髪とシャツ姿の少年、ツボに乗った冠を株った小柄な少年、どんな原理かは知らないが自力で飛んでいた跳ねた茶髪が特徴的な少女が次々『なんでも空港』に降り立った。

「日本の空には変なものが飛んでるなあ…。」

『收拾つかなくなるから、お前らまとめてサッサと帰れ!!』

—ドラえもんは呆れ返る様に彼らを見つめ、ディケイドは怒鳴り散らして彼らを追い払った…。

『貴様らアアアアア!! 私を忘れてふざけ合ってるんじゃない!! シェラアアアアアア!!』

—ハミングバードはさつきから自分の存在を無視して変な珍客を相手にしているディケイド達に激怒、シレイラを振り降ろしてディケイドの頭に叩き込もうとしたが…。

『おっと…忘れちゃいないぜ。』

『FINAL—ATTACK—RIDE…DE・DE・DE・DE
CADE!』

『な…!?!』

—しかしディケイドは焦る様子も見せずにカードをドライバーに装

填し、トドメの一撃のために高らかと跳躍してハミングバードのシレイラをかわした。

『おりゃあああああああああ!!』

『ギャバアアアアアアアアア!?!』

—そして何枚ものカードのビジョンがハミングバードの前に並び、それに向かってディケイドがキックを放ち、ハミングバードを文字通り『破壊』した：ディケイド最強の必殺技『ディメンションキック』の前に『破壊』出来ぬもの無し…。

『やったアアアアア!!』

「やりましたね! 士君! ユウスケ! 海東さ…ん???」

—強敵・ハミングバードロードを倒したディケイドに大喜びなクウガと夏海、しかしディエンドの姿だけは何処にも無かった。

『フツ…今日のところは手を引いてあげよう、だが次こそ! その「四次元ポケット」を頂くよ、じゃあね、士、そして青狸君。』

「ATTACK—RIDE:INVISIBLE!」

『やれやれ…諦めの悪い奴。』

『ボクは猫型ロボットだアアアアア!!』

—呆れる様に溜息をつくディケイド、ディエンドインビジルで透明化して消えたディエンドは途中で協力してくれたが恐らく彼は次も

何か仕掛けてくるだろう…そして未だに誰からも正確な名前を呼んでくれずにいるドラえもんは怒りの絶叫を上げつつ思う。

（しかしこの人達は…『仮面ライダー』って、一体…？）

—世界を越えて出会った未知なる存在にして世界を旅する『世界の破壊者』仮面ライダーディケイドⅡ門矢士、未来からやってきた青き猫型ロボット・ドラえもん、二人の出会いが果たして何を意味するか…？

第三話 一世界の破壊者VS神々の使徒一（後書き）

第三話：気づけば二ヶ月近くの放置、読者の皆様、リアルの忙しさがあるとはいえまことに申し訳ありませんでした：

オリジナルのハミングバードをはじめ鳥のアンノウン相手、週刊『仮面ライダーOFFICIAL DATA FILE』によれば電王関連のフォームライドカードでウィングを持つことが判明したので思い切ってデイクイドには手羽先：ではなくウィングフォームになってもらいました、ちなみにジークと『しんのすけの世界』との関係は前作『クレヨンしんちゃんの世界』に書かれてあります、『降臨、満を持して』の綴り違ってたらごめんなさい：

今回の道具は劇場版のレギュラー的道具『空気砲』、空気弾繋がりでペガサスボウガンにしましたが（酷）

マイナー？な『なんでも空港』、そして特別ゲストはドラえもんと同じく藤子先生のキャラ・オバケのQ太郎、そして後からやってきた怪物くん・ウメ星デンカ・エスパ―魔美の計四人です、『どこでも空港』のエピソードで彼らがゲスト参加してたのを見て今回のネタを思いつきました（おい）しかし無理矢理なギャグみたいに：（汗）

次回は士がドラえもん達に自分達の事情説明、そしてドラえもんのお風呂ヒロイン初登場の予定です！

それでは、柳雨でした！

第四話－L e t、s 風呂浪漫（バスロマン）－（前書き）

ドラえもんの協力によりハミングバードロードを撃破したデイケイ
ド達、一方、ドラえもんは彼らが何者なのか、興味を抱き：

第四話―Let's 風呂浪漫（バスロマン）―

「今日はもう色々ありすぎてなんか疲れた…写真館^{ウチ}に帰るぞ、ユウスケ、夏ミカン。」

「それに海東も逃げちゃったしな。」

「あ、待ってくださいよ！二人共…！！」

―ハミングバードロードとの戦いが終わり、変身を解いた士とユウスケ、そして二人の後を追いかける夏海…だが。

『ちよつと待ってよ！君達一体何者なんだい！？』

「それに『仮面ライダー』ってなんなの？？？」

（あ…やはりか）

一のび太とドラえもんに呼び止められた…まあ当然だろう、怪人が現れたり、一般人（ドラえもんは人ではないが）の眼前でライダーに変身などすれば質問攻めされるのは目に見えている。

「ふう…解った、解った…その代わり、お前らも『この世界』について話してもらうぞ。」

「『…？』」

―ギブ・アンド・テイク、士は自分達の事情を話す代わりに二人にも『この世界』の説明を求めた、しかし士の言葉の意味がイマイチ

解りにくかったか？首を傾げた、そして一同は場所を変えて光写真館に向かった…。

—やがて、光写真館のある場所に着くと…。

「あれ！？ここは確か空き地だったハズなのに！！」

『おかしいな…急に写真館なんて出来るわけないし、本当に土さん達は何者なんだろう？』

—そう…光写真館があつた場所は本来ならば、土管が三つ並べられただけの空き地であり、その裏には神成さんなるカミナリ親父が住んでるのが特徴といった、のび太達の遊び場：『だった』ハズの場所なのだ、それが突然我が物顔で居座りだした謎の写真館の存在に二人は大層驚いた。

「おい、今帰ったぜ。」

「ただいまーおじいちゃん。」

「ただいま。」

「やあ、みんな、おかえり…ん？お客さんかい？」

「『こ…こんにちは、お邪魔します。』」

—写真館に入ると、土達はこの写真館の主であり、夏海の祖父でもある眼鏡をかけた如何にも優しそうなおじいちゃんという印象の老

人・光栄次郎が現れたので、のび太とドラえもんは彼に挨拶する。

「はい、こんにちは、お茶やお菓子でもどうだい？」

「ありがとうございます。」

『うわあい！ドラ焼きだ！！』

「…お前、店でドラ焼きたくさん買ってなかったっけ？」

二人は子供らしく（しつこいようだがドラえもんは人間ではない）お茶やお菓子なドラ焼きに大層喜んだ、尚、士は『ただけドラ焼き好きなんだよ』と付け足しながらさりげなくツツコミを入れた。

『栄ちゃん、私お腹空いた…って、何？このおバカそうなメガネザルと青いタヌキは？』

「…おバカ！？メガネザル！？」

『タ、タ、タ…タヌキってまた言われたーッ！！ムキイイイイイイ！！誰だ！？出て来ーい！！』

いきなり何者かからのいわれなき侮辱（まあ、事実でもあるが…）を受けた二人は激しく動揺・激怒、そしてその『声の主』が二人の背後から現れた。

『はぁ～い♪キバーラちゃん♪登場～♪』

「『コウモリが喋ってるーッ！？』」

「白い小さなコウモリ…否、『キバの世界』以来、これまでの士の旅に同行してきたキバツ族の女の子でありキバツバツ三世の妹・キバーラ、彼女の存在と話せることが出来ることからか、のび太とドラえもんは驚愕した。」

「そいつは気にするな、スルーしろ。」

『ちょっと!?! ようやく出れた私の出番を早々失わせるようなこと言わないでよ!!!』

「緑茶をすすする士の冷たい一言にキバーラは『しんのすけの世界』での出番の不遇さを思い出し、焦りだした。」

「まあキバーラはさておき…オレは門矢士…で、その下僕二人はだな…。」

「誰が下僕ですか!?! 私は光夏海です。」

「お、お前という奴は…コホンッ! オレは小野寺ユウスケ、よろしくな!」

「僕は野比のび太です。」

『僕、ドラえもんです、言っとくけどタヌキじゃないからね。』

「一同、それぞれ自己紹介した後に、まず士達はのび太とドラえもんが知リたがっていた仮面ライダーや自分達の旅の目的について話した。」

「この世には世界は一つだけではなく、多くの様々な特色を持つ世

界がいくつもあり、それらには世界を守る仮面の戦士『仮面ライダー』が存在している、士達は彼らの世界を行き来し、彼らとの出会い：時には戦い、時には協力し合い、そして別れ：世界の崩壊を防ぎながら旅をしてる。

一尚、『シンケンジャーの世界』など、一部仮面ライダー以外の存在が世界を守っていたり、『しんのすけの世界』など仮面ライダーはおろかそれ以外の存在すらなかった例外もあったり、後にその二つの世界に新たなライダーが誕生したことなども語った。

「スゴイ！！仮面ライダーだけじゃなくて他に世界がいくつもあるなんてッ！！」

『信じられない話だけど：僕達の目の前で確かに変身してたから：恐らく事実かもしれないね、まさか「パラレルワールド並行世界」が存在、それもいくつもあるなんて：。』

一のび太は興奮気味に瞳をキラキラ輝かせて喜び、逆にドラえもんは冷静に士達の話に聴き入りながら頭の中で『仮面ライダーの世界』Ⅱ『並行世界』の存在が確立していく。

一そして次はドラえもんが『この世界』について話した。

一：と、言っても、『この世界』も仮面ライダーは存在しない至って平和な世界であり、『しんのすけの世界』と似たような感じらしい。

一ただ一点、違うといえばドラえもん自身の存在であろうか、ドラえもんは21世紀の未来で造られたお世話用ネコ型ロボットであり、将来のび太に訪れるあまりにも悲惨過ぎる不幸な運命Ⅱ未来を変え

るためにやって来たとのことである。

「「悲惨過ぎる不幸な運命???」」

『うん、実は…』

「ドラえもん! ヤメテー!」

一ちなみにドラえもんによるとその悲惨過ぎる不幸な運命の内容とは…大学入試に落第しまくり、就職難で自分で会社を興した方がいいが火事で丸焼けになって潰れ、大勢の借金取りに押しかけられ、のび太が残した借金のあまりの大きさに百年経っても返し切れず、彼の子孫Ⅱ孫の孫であるセワシの代まで迷惑をかけ、セワシは大変貧乏でありお年玉がたった五十円であるというもの。

—そして何より、なんの因果か? 剛田ジャイ子なるオカチメンコと結婚して沢山の子宝に恵まれたたことなど…。

「「どわーはっはっはっはっは!! ひー! ひー! げほっ…ゴホ…ぶふっ!!」」

「うわああああああん!! このポンコツロボット! 何、人の未来話してんだよ!!」

「痛ッ!? 殴るな! 事実だろ! ダ眼鏡!!」

一話を聞いていて失礼ながらも士達は笑いのツボを押されたわけでもないのに爆笑、のび太は泣きながらドラえもんを叩き喧嘩になった。

「しかし未来からタイムマシンでやって来たって…まるで『電王の世界』の話みたいだな。」

「確かに似てますね、未来を変えるためだけに…大変ですねドラちゃんも。」

「ユウスケと夏海はドラえもんがタイムマシンで過去の『この世界』にやって来たことから時の列車・デンライナーの存在がある『電王の世界』を思い出し、ドラえもんが相当苦労してると思い苦笑いした…というか、過去を変えて未来も変えるなんて、デンライナーのオーナーが聞いたら軽くブチ切れそうな話である…。」

「それで、一番気になってたが…海東…ああ、お前のポケットを狙ってきたコソ泥のことだが、あいつが狙うほどのお宝か？そのポケット、何やら変な道具を出したりしてたよな？」

『変などとはなんだ！変などとは！？これは四次元ポケットといって、未来のいろんなひみつ道具を出せるものさ。』

「士のどこか棘のある言葉にまたキレるドラえもんは取り敢えず四次元ポケットやひみつ道具に関して説明し、試しに何か道具を出した。」

「ひみつ道具は色々あるよ、例えばね…えーと、『タケコプター』！これを着けると空を飛べる！」

「竹トンボで…って、わー！？」

「『ユウスケーツ！？』」

「ドラえもんはタケコプターなる竹トンボとプロペラを合わせたような道具をユウスケの尻に着ける…するとユウスケの身体は回転するタケコプターによって浮かび上がり、そのまま外へ出てしまった。」

「ねえ、ドラえもん…あれは頭に着けるんじゃないかったっけ？」

『どこだっていいんだよ。』

「それを早く言えー！！」

『「ユウスケ…哀れ…。」』

「タケコプターを上手くコントロール出来ずにユウスケの絶叫だけが虚しく響き、土・夏海・キバーラは『南無』と唱えながら合掌した、御冥福を祈る…。」

「いや！死んでねーよ！！生きてるから！！」

「キャアアアア！？なんでパンツ丸出しですかッ！！」

『ワオ！！ユウスケ大胆♪』

「男のパンモロなんて見苦しいから、さっさと仕舞え。」

「…一応ユウスケは無事だった、ただタケコプターに振り回されて地面に落ちてしまい、ズボンだけが飛行を続け、哀れユウスケは自分の柄パンと恥を全員に晒す結果となった、パンツだから恥ずかしい。」

『後はこんなのもあるよ…えーと、あった! 「どこでもドア」! 行きたい場所をイメージしながら扉を開くとその場所に行けるんだよ、それじゃあのび太君、試してみて。』

「うん! 解った!」

「なぜだ…? 嫌な予感しかないんだが…。」

「ドラえもんは今度は『どこでもドア』なる文字通りのドアをポケットから出した…この道具の効果をのび太で実践させたが、士はなんとなく次の展開に嫌な予感を感じて冷や汗を垂らす…。」

—そしてそれが見事に当たった。

「…え?」

「♪♪♪…ッ!?」

『『「「…へ?」」「』』

「…どうやら、どこかの家のお風呂場に繋がったらしい…鼻歌混じりに浴槽へいざ入らんとする途中ののび太と同年代くらいの少女・源静香がその小学生とは思えぬ素晴らしき裸体を結果的に全員に晒してしまい…。」

「キャアアアアアアアアアア！のび太さんのエッチイイイイイ！」

「「『うぎゃあ熱ッちゃあああああ！？』」」

一静香は慌てて湯舟に浸かり、胸元を隠しながら顔を真っ赤にし、涙目で大絶叫を上げながらお湯をブチ撒けた。尚、のび太だけにかけるつもりが勢い余ってドラえもん、士やユウスケら男性陣まで巻き込んだ。

『のび太君！早くドア閉めて！！』

「解ったよ！静香ちゃん！ゴメンね…うぷッ！？」

「イヤアアアアア！！嫌い嫌い！大ッ嫌い！！」

一のび太はドラえもんに言われてハツとなり、静香の罵声とお湯を浴びながら慌ててドアを閉めた。

「「…おい。」」

「「…ヒッ！？」」

一巻き添えを食らってズブ濡れになった士とユウスケはのび太をジト目で睨んだ。

「君の行きたい場所のイメージって、さっきの静香って子のお風呂場か！？」

「変態か！おのれは！？」

「いや、違うよ〜これはそのいつものことで〜。」

「いつも!?! あなた最低です!」

『のびちゃんったら、サイッテー♪』

「うわああああん!! ドラえもん!!」

『いや、僕は関係ないからね!?!』

—当然怒りはのび太に向けられた、下手な言い訳…どこでもドアで静香の入浴シーンにシーンに出くわすというはお馴染みであると弁解したら、顔を赤らめた夏海とキバーラにまで罵られた、散々であるが自業自得である。

—しかし、そんな騒ぎの中、何故か士が一人、腑に落ちないような顔をしていた。

（気のせいかな…嫌な予感はさっきのお風呂騒ぎで当たったはずなのに、何故かまだモヤモヤするな…。）

—そう…彼はどういう訳か不安を感じていた、今ここで『ナニカ』を見逃したら後悔するような…そんな予感を…。

—源家・浴室。

（全くもう…のび太さんったら！！けどあの周りの人達って誰なのかしら？）

―静香は先程ののび太によるハプニングをプリプリ怒り、同時に見慣れない青年やら女性やら白いコウモリが存在に首を傾げた。

「でも…まあいいわ♪ああ…気持ち良い♪」

一度々あんなこともあるが静香は大のお風呂好きのため、大抵こうして湯舟に浸かれれば嫌なことも忘れられるのだ。

―…だが、彼女は気づかなかった、自分の無防備な生まれたままの姿をのび太達がドアでそれを見る前から眺めていた『侵入者』の存在に…。

（うひょひょひょひょ…。）

―浴室の天井に張りつきながらじつくり…ジットリといやらしい笑みを零しながら、『自身の存在』などに全く気づかない静香の裸体をジロジロ見ている『透明なナニカ』がいた。

（すぐ殺してしまうには、もったいないのお〜。）

―助平な視線で静香の完成された肢体をガン見しながら、うつすらとその姿の輪郭を現わすのは一体の『灰色の異形』…。

―それは、『ファイズの世界』の『オルフェノク』と呼ばれる怪人^{そんざい}もつとも…土達が戦ったアンノウン・ハミングバードロードと同じく何故『この世界』にいるかは不明だが…。

一常にその大きめな眼をグリグリと回転させ、口から長い舌を垂らす、忍者みたいなイメージの外見をしたカメレオンオルフェノクは自分の特質であるカメレオンとしての能力『保護色』で周りの景色に溶け込むように擬態しつつ、平然とこんな犯罪行為をやらかしていた。

（うひょひょひよ、最近のガキは発育いいなあ〜是非とも『味見』をしたいもんだぜえ〜！！）

一カメレオンオルフェノクはいやらしく頭の中で静香をあれこれと言葉ではとても言い表せない様な手段で痛ぶるビジョンを浮かべつつ、ニタニタ笑う。

「そろそろシャワー浴びようっと♪」

（キターーーッ！！）

一静香は浴槽から上がってシャワーに手をかけた、一番肌を晒すこのシーンにカメレオンは興奮気味にガッツポーズを取り、保護色をより強めながら、シャワーを浴びる彼女の背後に無音で立つ…。

「♪♪♪」

（ゲへ、ゲへへ…うひょひょひょ！！）

一当然静香はカメレオンの存在なんかに気づいちゃいない、それもいいことにカメレオンはゆっくりとその魔の手を伸ばす…。

（Let's！！風呂浪漫！！）

―静香の貞操の最大のピンチ、ああ…『この世界』の存亡が…。

「KAMEN―RIDE∴DECADE!」

「え？」

（え？）

―…と、ここで妙な電子音とともに、再びどこでもドアが出現し、中から…。

『Let's 風呂浪漫。』

―…洗面器・手ぬぐい・石鹸といったお風呂3点セットを脇に抱えて何故か仁王立ちで堂々と構えてるディケイドが現れた。

（（変態だあああああああああ!!!））

―…静香とカメレオンは一目で彼を新手の変態であることを確信したという…。

第四話－Let's 風呂浪漫（バスロマン）－（後書き）

第四話：正直ふざけ過ぎた感が否めません、反省してます（汗）

アニメ・特撮の異なるもの同士のコラボ小説において一番大変なのは互いの紹介や目的を明かすシーン、大切なことなので一番手拔きが出来ないため苦労しました（泣）キバーラや栄次郎はまた空気化の予感が：

未来の存在から電王の話を出しましたが、ドラえもんみたいに人の未来を変えるなんてことやったら絶対オーナー切れます、確実に：例えそれが良太郎以上に不幸な運命でも（酷）、尚、のび太の悲惨な末路やユウスケがタケコプターで飛んでく場面はドラえもんの記念すべき第一話を見て参考にしました

ついに登場、お風呂ヒロイン（ヒロインともいう）・静香ちゃん、漫画だとチ○ビまで晒してたりとやたらエロいです、どこでもドアの行き先が静香ちゃんの入浴はもやお約束、そんなところへ異物が混入：

カメレオンオルフェノクよ、この小説を18禁にする気か！？いえ、書いたのは私ですが（コラ）正直勇気要りましたよ今回の話：そして何故か妙なテンションのディケイドも緊急登場、果たして本当に小説の存亡は：（汗）
せかい

次回のはちやめちやお風呂バトルに乞うご期待ください、それでは！柳雨でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8725m/>

仮面ライダーディケイド-ドラえもんの世界-

2010年12月19日22時45分発行